

第4章 地域社会との関係から見た不安感、他

この章では、調査票の間 27～間 33 を分析軸とし、地域社会との関係から見た不安感等を分析していく。

1. 居住年数と不安感

調査票の間 27 では、「あなたは、現在の地域にどれくらい住んでいますか。ここでいう「地域」は、小・中学校区くらいの範囲をお考え下さい」とたずねた。その結果、以下のような結果がえられた。「1年未満」2.6% (47人)、「1年以上5年未満」11.1% (198人)、「5年以上10年未満」14.1% (251人)、「10年以上20年未満」20.5% (365人)、「20年以上」51.5% (917人)、無回答0.2% (4人)。

以下、無回答を欠損値として分析対象から除外して分析していく。また、「1年未満」という回答者が少ないため、「1年以上5年未満」という回答と統合し、「5年未満」として集計していく。

(1) 居住年数と不安感

表Ⅲ-4-1 は、居住年数と犯罪被害の不安感との関連を表したものである。犯罪被害の不安感は、第3章における分析と同様、調査票の間2「あなたご自身が、日頃、犯罪の被害にあうのではないかと不安を感じることがありますか」とたずねた結果である。「よくある」と「たまにある」という回答を統合し、犯罪被害の不安感が「ある」群とし、同様に「ほとんどない」と「全くない」という回答を統合し、「ない」群としてある。

表Ⅲ-4-1 居住年数と不安感 (％)

	ある	ない	合計	人数(人)
5年未満	53.7	46.3	100.0	244
5年以上10年未満	56.6	43.4	100.0	249
10年以上20年未満	53.7	46.3	100.0	363
20年以上	52.7	47.3	100.0	913
全体	53.6	46.4	100.0	1769

n. s.

犯罪被害の不安感が「ある」という割合に注目すると、居住年数が5年未満では53.7%、5年以上10年未満では56.6%、10年以上20年未満では53.7%、20年以上では52.7%であった。居住年数による不安感の違いはほとんどない。カイ二乗検定においても、有意差はなかった。

(2) 居住年数と年齢と不安感

ところで、居住年数に性別での違いはない（クロス集計した結果、 $p=.59$ ）が、第3章の分析から、年齢によって犯罪不安感の有無に違いがあることがわかっている。そこで、年齢をコントロールした集計を行った。年齢が高いほど居住年数も長いことも考えられるので、年齢をコントロールすることで居住年数のみの効果を観察できるからである。

その結果、20代、30代、40代、60代、70歳以上では、カイ二乗検定の結果、有意な差はみられなかった。すなわち、ほとんどの世代では居住年数と不安感との関連はみられない。ただし、例外的に50代において5%水準で有意な差がみられた。表Ⅲ-4-2は、50代に関してのみ、居住年数と不安感との関連を示したものである。

表Ⅲ-4-2 50代の居住年数と不安感 (%)

	ある	ない	合計	人数(人)
5年未満	32.1	67.9	100.0	28
5年以上10年未満	50.0	50.0	100.0	36
10年以上20年未満	64.7	35.3	100.0	68
20年以上	47.1	52.9	100.0	221

$p<.05$

居住年数が5年未満では32.1%、5年以上10年未満では50.0%、10年以上20年未満で64.7%、20年以上では47.1%となっている。

(3) 居住年数と夜の一人歩きの不安感

ついで、居住年数と夜の一人歩きの不安感について分析していく。夜の一人歩きの不安感とは、調査票の問9「あなたは夜11時を過ぎてから、住んでいる地域を1人で歩いているとき、犯罪にあう不安をどの程度感じていますか」とたずねた結果を用いる。

回答は、「非常に不安を感じる」「ある程度不安を感じる」「あまり不安を感じない」「全く不安を感じない」の4つと、「わからない」の5つの選択肢であったが、「非常に不安を感じる」「ある程度不安を感じる」を統合して不安感が「ある」群とし、「あまり不安を感じない」「全く不安を感じない」を統合して不安感が「ない」群とし、「わからない」の3群に分けて集計する。

また、夜の一人歩きの不安感は男女の違いが大きいため、男女別に集計した。表Ⅲ-4-3

は、その結果を示したものである。

表Ⅲ-4-3 居住年数と夜の一人歩きの不安感 (％)

		ある	ない	分からない	合計	人数(人)
男性	5年未満	34.7	57.6	7.6	100.0	118
	5年以上10年未満	40.5	50.4	9.1	100.0	121
	10年以上20年未満	43.6	49.1	7.3	100.0	165
	20年以上	40.7	48.7	10.7	100.0	450
	男性計	40.4	50.2	9.4	100.0	854
女性	5年未満	65.4	20.5	14.2	100.0	127
	5年以上10年未満	70.4	20.0	9.6	100.0	125
	10年以上20年未満	55.6	26.8	17.7	100.0	198
	20年以上	59.4	25.8	14.8	100.0	458
	女性計	60.9	24.4	14.6	100.0	908

男性 n.s. 女性 n.s.

不安感が「ある」という割合をみると、男性では5年未満34.7%、5年以上10年未満では40.5%、10年以上20年未満では43.6%、20年以上では40.7%となっている。居住年数5年未満で若干低めではあるが、カイ二乗検定では統計的有意差はなかった。また、男性では約1割が「わからない」という回答であることに留意しなければならない。

女性では、居住年数5年未満では65.4%、5年以上10年未満では70.4%、10年以上20年未満では55.6%、20年以上では59.4%となった。居住年数5年以上10年未満の女性の不安感が高めではあるが、カイ二乗検定では統計的有意差はなかった。また、女性では約15パーセントが「わからない」という回答であり、これは男性よりも多い。

2. 居住継続希望と不安感

調査票問28で、「あなたは、現在お住まいの地域に住み続けたいですか」とたずねた。回答は、「住み続けたい」「どちらでもよい」「地域外に引っ越したい」の3件法でえた。

その結果、「住み続けたい」64.3% (1,145人)「どちらでもよい」30.6% (545人)、「地域外に引っ越したい」4.8% (85人)、無回答0.4% (7人)となった。以下、無回答を欠損値として集計対象から除外して分析していく。

(1) 居住継続希望と不安感

表Ⅲ-4-4は、居住継続希望と不安感との関連を表したものである。

犯罪被害の不安感が「ある」という割合をみると、「住み続けたい」人では52.7%、「どちらでもよい」では54.2%、「地域外に引っ越したい」人では62.4%となっており、現在居住の地域外に引っ越したいと考えている人は、やや不安感が高い傾向がみられる。ただし、カイ二乗検定の結果、統計的有意差はない。

表Ⅲ-4-4 居住継続希望と不安感 (%)

	ある	ない	合計	人数(人)
住み続けたい	52.7	47.3	100.0	1,139
どちらでもよい	54.2	45.8	100.0	541
地域外に引っ越したい	62.4	37.6	100.0	85

n. s.

なお、ここでの分析を性別に行うと、より違いが際立つ。表Ⅲ-4-5は、性別に居住継続希望と不安感の関連を示したものである。

表Ⅲ-4-5 性別にみた居住継続希望と不安感 (%)

		ある	ない	合計	人数(人)
男性	住み続けたい	50.3	49.7	100.0	541
	どちらでもよい	50.9	49.1	100.0	275
	地域外に引っ越したい	53.8	46.2	100.0	39
	男性計	50.6	49.4	100.0	855
女性	住み続けたい	54.8	45.2	100.0	598
	どちらでもよい	57.5	42.5	100.0	266
	地域外に引っ越したい	69.6	30.4	100.0	46
	女性計	56.4	43.6	100.0	910

男性 n. s. 女性 n. s.

男性では居住継続希望と不安感との間にほとんど関連はみられないが、女性では、不安感が「ある」という割合をみると、「住み続けたい」54.8%、「どちらでもよい」57.5%、「地域外に引っ越したい」69.6%となっており、10ポイント以上の差がある。男女で居住地域との関わり方が違うためであろう。ただし、カイ二乗検定では統計的有意差はない。

(2) 居住継続希望と夜の一人歩きの不安感

表Ⅲ-4-6は、居住継続希望と夜の一人歩きの不安感を、性別に集計した結果を示したものである。

男性では、居住継続希望と夜の一人歩きの不安感との間にほとんど関連はみられない。いずれも、4割前後であり、統計的有意差もない。

女性では、夜の一人歩きの不安感が「ある」という割合に注目すると、「住み続けたい」人では57.2%、「どちらでもよい」人では66.2%、「地域外に引っ越したい」人では76.1%となった。地域外に引っ越したい人の夜の一人歩きの不安感が高いことがわかる。

居住継続希望というものを、地域への愛着と位置づけると、地域への愛着のある人ほど夜の一人歩きの不安感が低いという解釈もできるが、逆の解釈も成り立つ。夜の一人歩きに不安感を持つ地域では、その地域に愛着をもてない、という解釈である。なお、女性ではカイ二乗検定の結果1%水準で有意な差がみられた。

表Ⅲ-4-6 居住継続希望と夜の一人歩きの不安感 (％)

		ある	ない	分からない	合計	人数(人)
男性	住み続けたい	39.0	51.6	9.5	100.0	539
	どちらでもよい	43.5	47.5	9.1	100.0	276
	地域外に引っ越したい	39.5	52.6	7.9	100.0	38
	男性計	40.4	50.3	9.3	100.0	853
女性	住み続けたい	57.2	28.1	14.6	100.0	594
	どちらでもよい	66.2	18.0	15.8	100.0	266
	地域外に引っ越したい	76.1	15.2	8.7	100.0	46
	女性計	60.8	24.5	14.7	100.0	906

男性 n. s. 女性 $p < .01$

3. 近隣関係と不安感

ここでは、近隣関係と不安感との関連について分析していく。調査票の問29で、「あなたは、ご近所に、お互いに相談したり助け合ったりしている人がいますか」とたずねた。回答は、「たくさんいる」「ある程度いる」「あまりいない」「ほとんどいない」の4件法でえた。

その結果、「たくさんいる」16.1% (287人)、「ある程度いる」50.8% (905人)、「あまりいない」22.1% (393人)、「ほとんどいない」10.7% (191人)、無回答0.3% (6人)となった。以下、無回答を欠損値として集計対象から除外して分析していく。

(1) 近隣関係と不安感

表Ⅲ-4-7は、近隣関係と不安感の関連を示したものである。不安感が「ある」という割合に注目すると、「たくさんいる」46.9%、「ある程度いる」56.2%、「あまりいない」54.8%、「ほとんどいない」48.2%となっている。

それほど大きな差ではないが、直線的な関係ではなく、近隣とのサポート関係が非常に多い場合とほとんどない場合に不安感が低く、両者の中間の場合に不安感が高い。カイ二乗検定の結果5%水準で有意な差である。

解釈が難しい結果ではあるが、近隣に助け合える人が「ほとんどいない」というのは、きわめて都市的な居住環境である場合もあれば、そもそも、居住地域に昼間はほとんどいない、ということも考えられる。

表Ⅲ-4-7 近隣関係と不安感 (%)

	ある	ない	合計	人数(人)
たくさんいる	46.9	53.1	100.0	286
ある程度いる	56.2	43.8	100.0	900
あまりいない	54.8	45.2	100.0	389
ほとんどいない	48.2	51.8	100.0	191

$p < .05$

表Ⅲ-4-8 性別にみた近隣関係と不安感 (%)

		ある	ない	合計	人数(人)
男性	たくさんいる	39.8	60.2	100.0	123
	ある程度いる	54.7	45.3	100.0	404
	あまりいない	50.4	49.6	100.0	226
	ほとんどいない	47.1	52.9	100.0	102
	男性計	50.5	49.5	100.0	855
女性	たくさんいる	52.1	47.9	100.0	163
	ある程度いる	57.5	42.5	100.0	496
	あまりいない	60.7	39.3	100.0	163
	ほとんどいない	49.4	50.6	100.0	89
	女性計	56.3	43.7	100.0	911

男性 $p < .05$ 女性 n. s.

表Ⅲ-4-8は、近隣関係と不安感の関連について、性別に集計した結果を示したものである。男性の場合、近隣に助け合える人が「たくさんいる」場合は犯罪被害の不安感が低く、4割程度である。それ以外の場合は5割前後となっており、カイ二乗検定の結果5%水準で有意な差であった。

女性の場合は、「たくさんいる」場合は男性と同様に不安感が低いが、「ほとんどいない」場合も不安感が低く、両者の昼間においてやや不安感が高いという結果になった。ただし、統計的有意差はない。

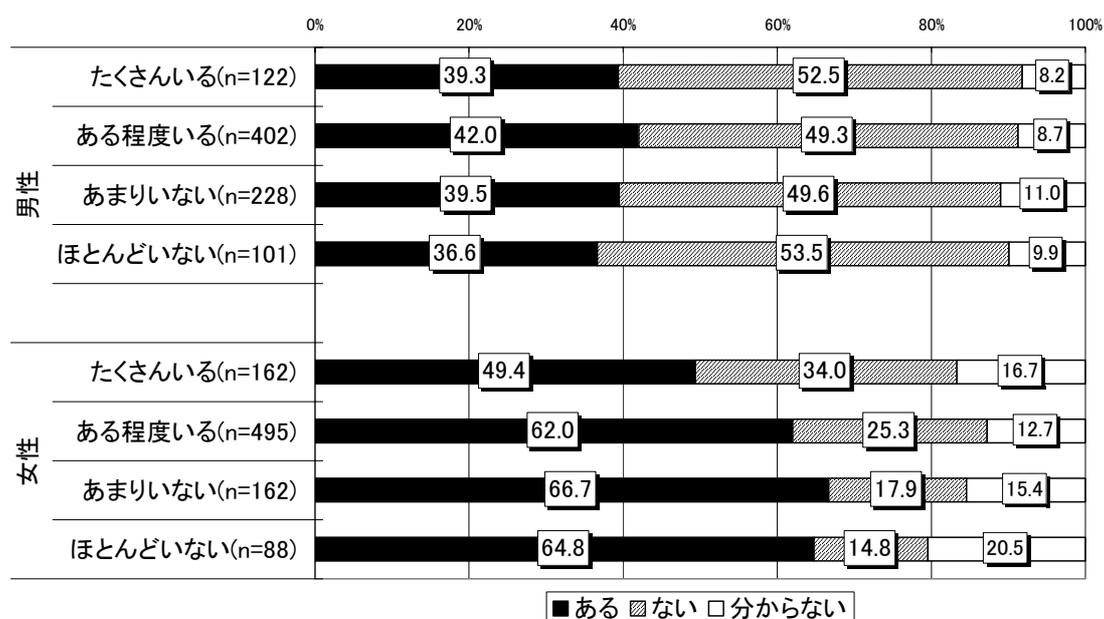
(2) 近隣関係と夜の一人歩きの不安感

図Ⅲ-4-1は、近隣関係と夜の一人歩きの不安感について性別に集計した結果を示したものである。

男性の場合、近隣関係と夜の一人歩きの不安感の間にはほとんど関連はみられない。統計的有意差もない。

しかし、女性では、近隣に助け合える人が「たくさんいる」場合は、夜の一人歩きの不安感が「ある」という回答は49.4%で、それ以外の場合は6割強であるのと比べ、低くなっている。すなわち、女性の場合は、近隣との結びつきが強ければ、夜の一人歩きの不安感も低くなる傾向がみられるのである。カイ二乗検定の結果、1%水準で有意な差であった。ただし、女性の場合、「わからない」という回答も多く、とりわけ、近隣に助け合える人が「ほとんどいない」場合は、2割の人が「わからない」としている。

図Ⅲ-4-1 近隣関係と夜の一人歩きの不安感



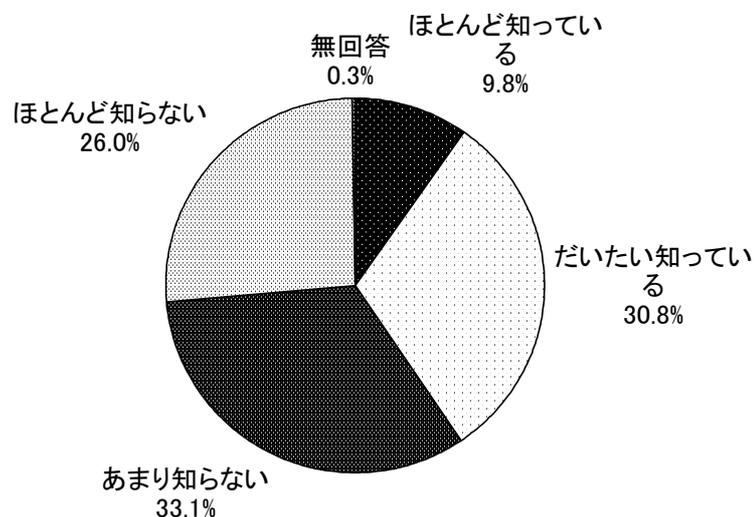
男性 n.s. 女性 $p < .01$

4. 近隣の子どもの面識と不安感

調査票問 30 で、「あなたは、近所の小・中学生がどこの家の子どもか知っていますか」とたずねた。回答は「ほとんど知っている」「だいたい知っている」「あまり知らない」「ほとんど知らない」の4件法でえた。

その結果、図Ⅲ-4-2 に示されているように、「ほとんど知っている」9.8% (175 人)、「だいたい知っている」30.8% (548 人)、「あまり知らない」33.1% (589 人)、「ほとんど知らない」26.0% (464 人)、無回答 0.3% (6 人) となった。以下、無回答を欠損値とし、集計対象から除外して分析していく。

図Ⅲ-4-2 近隣の子どもの面識



(1) 近隣の子どもの面識と不安感

表Ⅲ-4-9 は、近隣の子どもの面識と不安感との関連を表したものである。

不安感が「ある」割合に注目すると、近所の子どもの「ほとんど知っている」場合は 54.0%、「だいたい知っている」場合は 53.7%、「あまり知らない」場合は 57.2%、「ほとんど知らない」場合は 48.5%となっている。カイ二乗検定の結果、5%水準で有意な差であった。

近隣の子どもの知らない場合、すなわち、近隣との関係が弱い方が犯罪被害の不安感が低くなっており、解釈が困難であるが、これは、性差を反映している可能性が考えられる。すなわち、男性は女性よりも近隣の子どもの面識がなく、かつ、男性は女性よりも不安感が低いためこのような結果となった、という可能性である。

そこで、表Ⅲ-4-10 では性別に集計を行った。

表Ⅲ-4-9 近隣の子どもの面識と不安感 (％)

	ある	ない	合計	人数(人)
ほとんど知っている	54.0	46.0	100.0	174
だいたい知っている	53.7	46.3	100.0	546
あまり知らない	57.2	42.8	100.0	586
ほとんど知らない	48.5	51.5	100.0	460

$p < .05$

表Ⅲ-4-10 性別にみた近隣の子どもの面識と不安感 (％)

		ある	ない	合計	人数(人)
男性	ほとんど知っている	49.2	50.8	100.0	65
	だいたい知っている	54.8	45.2	100.0	228
	あまり知らない	53.6	46.4	100.0	302
	ほとんど知らない	43.2	56.8	100.0	259
	男性計	50.5	49.5	100.0	854
女性	ほとんど知っている	56.9	43.1	100.0	109
	だいたい知っている	52.8	47.2	100.0	318
	あまり知らない	60.9	39.1	100.0	284
	ほとんど知らない	55.2	44.8	100.0	201
	女性計	56.4	43.6	100.0	912

男性 $p < .05$ 女性 n. s.

性別に集計すると、女性では有意差がなくなる。すなわち、近隣の子どもの面識とかがわりなく、5割強から6割程度の人に不安感があり、両者の関連はみられない。

それに対し、男性では近隣の子どもの面識を「ほとんど知らない」場合、不安感が「ある」割合が43.2%と低くなっている。カイ二乗検定の結果、5%水準で有意な差であった。

すなわち、先に可能性を示唆したように、表Ⅲ-4-9の結果はある種の男性の特性を反映したものと考えられるのである。とりわけ、20代の若い男性の特性を反映したものと考えられる。第3章の図Ⅲ-3-2でみたように、20代男性は他と比べて犯罪被害の不安感が低い。そこで、男性に限定して、近隣の子どもの面識状況を年齢別に集計してみた。その結果、近隣の子どもの面識を「ほとんど知らない」という割合が、男性20代50.6%、男性30代34.0%、男性40代20.4%、男性50代25.7%、男性60代24.2%、男性70歳以上26.2%となった。男性全体では30.5%であった。ちなみに、女性全体では22.1%である。

したがって、20代男性は近隣の子どもの面識がなく、かつ、犯罪被害の不安感が低いことが

めに、その影響が表れたものと考えられるのである。

(2) 近隣の子どもの面識と夜の一人歩きの不安感

表Ⅲ-4-11 は、性別に、近隣の子どもの面識と夜の一人歩きの不安感を表したものである。

男性の場合、全体では4割程度の人に不安感があるが、近隣の子どもの「ほとんど知らない」場合は32.4%と低くなっている。これは、若い男性の特性を反映しているものと考えられる。なお、カイ二乗検定の結果、 $p=0.051$ で5%水準では統計的有意差はない。

女性では、「ほとんど知っている」場合は51.9%、「だいたい知っている」場合は59.2%、「あまり知らない」場合は65.7%、「ほとんど知らない」場合は61.2%となった。近隣の子どもの「ほとんど知っている」女性は夜の一人歩きの不安感が低い傾向にある。ただし、不安感が「ない」という割合に注目すると、いずれも2割強でほとんど違いはないことがわかる。不安感がないわけではなく、「わからない」という回答が多いのである。近隣の子どもの「ほとんど知っている」女性の25.0%と、4人にひとりが「わからない」と回答しており、無視しえない割合である。女性の場合、カイ二乗検定の結果、5%水準で有意な差がみられた。

表Ⅲ-4-11 近隣の子どもの面識と夜の一人歩きの不安感 (%)

		ある	ない	分からない	合計	人数(人)
男性	ほとんど知っている	42.2	50.0	7.8	100.0	64
	だいたい知っている	44.9	44.1	11.0	100.0	227
	あまり知らない	43.0	49.7	7.3	100.0	302
	ほとんど知らない	32.4	56.8	10.8	100.0	259
	男性計	40.3	50.4	9.4	100.0	852
女性	ほとんど知っている	51.9	23.1	25.0	100.0	108
	だいたい知っている	59.2	26.6	14.2	100.0	316
	あまり知らない	65.7	23.0	11.3	100.0	283
	ほとんど知らない	61.2	23.9	14.9	100.0	201
	女性計	60.8	24.4	14.8	100.0	908

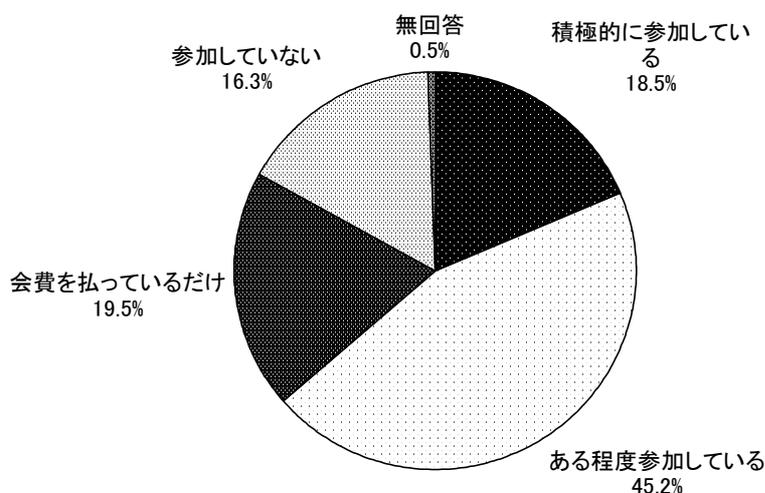
男性 n. s. 女性 $p<.05$

5. 町内会への参加と不安感

調査票問 30 で、「あなた自身や同居の家族は、町内会・自治会等にどの程度参加してい

ますか」とたずねた。回答は、「行事などにも積極的に参加している」「ある程度参加している」「会費を払っているだけである」「参加していない」の4件法でえた。その結果、「行事などにも積極的に参加している」18.5% (330人)、「ある程度参加している」45.2% (805人)、「会費を払っているだけである」19.5% (347人)、「参加していない」16.3% (291人)、無回答0.5% (9人)となった。以下、無回答を集計対象から除外して分析していく。

図Ⅲ-4-3 町内会への参加



(1) 町内会への参加と不安感

表Ⅲ-4-12は、町内会への参加状況と不安感との関連を示したものである。

表Ⅲ-4-12 町内会への参加と不安感 (%)

	ある	ない	合計	人数 (人)
積極的に参加している	54.4	45.6	100.0	329
ある程度参加している	51.4	48.6	100.0	800
会費を払っているだけ	58.4	41.6	100.0	344
参加していない	52.6	47.4	100.0	291

n. s.

不安感が「ある」という割合をみると、「行事などにも積極的に参加している」54.4%、「ある程度参加している」51.4%、「会費を払っているだけである」58.4%、「参加していない」52.6%となった。「会費をはらっているだけ」と回答した人の不安感が若干高めでは

あるが、カイ二乗検定の結果、統計的有意差はなかった。

(2)町内会への参加と夜の一人歩きの不安感

表Ⅲ-4-13 は、町内会への参加状況と夜の一人歩きの不安感について、性別に集計した結果を示したものである。

表Ⅲ-4-13 町内会への参加と夜の一人歩きの不安感 (%)

		ある	ない	分からない	合計	人数(人)
男性	積極的に参加している	43.0	51.9	5.1	100.0	158
	ある程度参加している	42.6	47.0	10.4	100.0	383
	会費を払っているだけ	40.0	48.1	11.9	100.0	160
	参加していない	32.5	58.9	8.6	100.0	151
	男性計	40.4	50.2	9.4	100.0	852
女性	積極的に参加している	48.5	29.0	22.5	100.0	169
	ある程度参加している	63.6	22.7	13.7	100.0	415
	会費を払っているだけ	65.2	23.9	10.9	100.0	184
	参加していない	61.3	24.8	13.9	100.0	137
	女性計	60.8	24.4	14.8	100.0	905

男性 n. s. 女性 $p < .05$

夜の一人歩きの不安感が「ある」割合に注目すると、男性では、「積極的に参加している」43.0%、「ある程度参加している」42.6%、「会費を払っているだけ」40.0%、「参加していない」32.5%となっている。町内会に「参加していない人」の夜の一人歩きの不安感がやや低い傾向がみられる。ただし、カイ二乗検定の結果、 $p = .08$ で統計的有意差はない。これは、若い男性の特性を反映したものと考えられる。

参考までに、年代別に男性の町内会参加状況を集計すると、「参加していない」という割合が、20代40.3%、30代20.6%、40代11.8%、50代14.3%、60代9.1%、70歳以上5.8%となっており、20代では4割が参加していないことがわかる。

女性では、「積極的に参加している」48.5%、「ある程度参加している」63.6%、「会費を払っているだけ」65.2%、「参加していない」61.3%となっている。町内会に積極的に参加している女性は、夜の一人歩きの不安感が低い傾向がみられる。カイ二乗検定の結果、5%水準で有意な差であった。

ただし、積極的に参加しているという女性は、どちらかといと高齢の女性であり、ここでは、高齢の女性の特性を反映しているきらいもある。参考までに、年代別に女性の町内

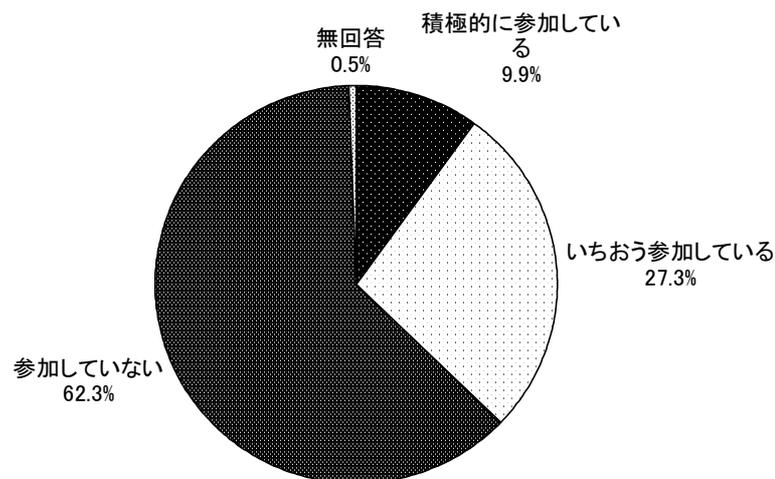
会参加状況を集計すると、「積極的に参加している」という割合が、20代 12.3%、30代 14.6%、40代 21.9%、50代 12.4%、60代 26.3%、70歳以上 25.9%となっている。60代以上では4人にひとり以上が「積極的に参加している」と回答していることがわかる。

6. 地域団体への参加と不安感

調査票の問32で、「あなたは、お住まいの地域でスポーツ団体・文化芸術団体・ボランティア団体などの、自主的な団体の活動に参加していますか」とたずねた。回答は、「積極的に参加している」「いちおう参加している」「参加していない」の3件法でえた。

その結果、「積極的に参加している」9.9%（176人）、「いちおう参加している」27.3%（486人）、「参加していない」62.3%（1,111人）、無回答0.5%（9人）となった。以下、無回答を集計対象から除外して分析していく。

図Ⅲ-4-4 地域団体への参加



(1) 地域団体への参加と不安感

表Ⅲ-4-14は、地域団体への参加状況と不安感との関連を表したものである。不安感が「ある」という割合をみると、「積極的に参加している」51.7%、「いちおう参加している」51.4%、「参加していない」54.9%となり、ほとんど差はない。統計的有意差もなかった。

しかし、性別に集計すると、若干の違いがみられる。性別に集計した結果を表Ⅲ-4-15に示した。

表Ⅲ-4-14 地域団体への参加と不安感 (％)

	ある	ない	合計	人数 (人)
積極的に参加している	51.7	48.3	100.0	176
いちおう参加している	51.4	48.6	100.0	481
参加していない	54.9	45.1	100.0	1,107

n. s.

表Ⅲ-4-15 性別にみた地域団体への参加と不安感 (％)

		ある	ない	合計	人数 (人)
男性	積極的に参加している	48.9	51.1	100.0	88
	いちおう参加している	53.2	46.8	100.0	235
	参加していない	50.1	49.9	100.0	529
	男性計	50.8	49.2	100.0	852
女性	積極的に参加している	54.5	45.5	100.0	88
	いちおう参加している	49.6	50.4	100.0	246
	参加していない	59.3	40.7	100.0	578
	女性計	56.3	43.8	100.0	912

男性 n. s. 女性 $p < .05$

男性では、地域団体への参加状況にかかわらず、おおむね5割前後に不安感があり、違いはみられない。統計的有意差もない。

女性では、不安感の「ある」割合が「積極的に参加している」54.5%、「いちおう参加している」49.6%、「参加していない」59.3%となった。地域団体に参加していない女性の不安感がやや高い傾向がみられる。カイ二乗検定の結果、5%水準で有意な差であった。

なお、概して、若い世代ほど地域団体に参加していない割合が高い。女性の状況を示すと、「参加していない」割合が、20代86.3%、30代70.7%、40代51.9%、50代60.3%、60代55.1%、70歳以上54.9%となっている。

(2) 地域団体への参加と夜の一人歩きの不安感

表Ⅲ-4-16 は、地域団体への参加状況と夜の一人歩きの不安感について性別に集計したものである。夜の一人歩きの不安感が「ある」という割合に注目していくと、男性では、「積極的に参加している」40.2%、「いちおう参加している」44.9%、「参加していない」38.2%となった。あまり違いはみられない。統計的有意差もない。

女性では、「積極的に参加している」55.7%、「いちおう参加している」61.4%、「参加し

ていない」61.4%となった。男性と同じく、地域団体への参加状況による違いはみられない。統計的有意差もなかった。

表Ⅲ-4-16 地域団体への参加と夜の一人歩きの不安感 (％)

		ある	ない	分からない	合計	人数 (人)
男性	積極的に参加している	40.2	55.2	4.6	100.0	87
	いちおう参加している	44.9	48.3	6.8	100.0	234
	参加していない	38.2	50.5	11.3	100.0	529
	男性計	40.2	50.4	9.4	100.0	850
女性	積極的に参加している	55.7	28.4	15.9	100.0	88
	いちおう参加している	61.4	24.0	14.6	100.0	246
	参加していない	61.4	24.1	14.5	100.0	573
	女性計	60.9	24.5	14.7	100.0	907

男性 n. s. 女性 n. s.

7. 住民移動の認知と不安感

調査票の間 33 で、「あなたのお住まいの地域の人びとは、長く住んでいる人が多いと思いますか、それとも人の入れ替わりが激しいと思いますか」とたずねた。回答は、「長く住んでいる人が多い」「どちらかといえば長く住んでいる人が多い」「どちらかといえば入れ替わりが激しい」「入れ替わりが激しい」の4件法でえた。

その結果、「長く住んでいる人が多い」53.4% (952人)、「どちらかといえば長く住んでいる人が多い」36.0% (642人)、「どちらかといえば入れ替わりが激しい」8.4% (149人)、「入れ替わりが激しい」1.3% (24人)、無回答0.8% (15人)となった。

以下、無回答を欠損値として集計対象から除外して分析していく。また、「入れ替わりが激しい」という回答と「どちらかというに入れ替わりが激しい」という回答を統合し、「入れ替わりがある」群として分析していく。

(1) 住民移動の認知と不安感

表Ⅲ-4-17 は、住民移動の認知と不安感の関連を表したものである。不安感が「ある」という割合をみると、「長く住んでいる人が多い」52.3%、「どちらかといえば長い」54.8%、「入れ替わりがある」58.5%となっている。住民の移動を認知しているほど不安感が高い方向ではあるが、それほど大きな差ではない。カイ二乗検定の結果、統計的有意差はなかった。

表Ⅲ-4-17 住民移動の認知と不安感 (％)

	ある	ない	合計	人数 (人)
長く住んでいる人が多い	52.3	47.7	100.0	947
どちらかといえば長い	54.8	45.2	100.0	639
入れ替わりがある	58.5	41.5	100.0	171

n. s.

(2) 住民移動の認知と夜の一人歩きの不安感

表Ⅲ-4-18 は、住民移動の認知と夜の一人歩きの不安感について性別に集計したものである。

表Ⅲ-4-18 住民移動の認知と夜の一人歩きの不安感 (％)

		ある	ない	分からない	合計	人数 (人)
男性	長く住んでいる人が多い	37.7	53.0	9.3	100.0	440
	どちらかといえば長い	42.5	48.4	9.0	100.0	322
	入れ替わりがある	44.8	43.7	11.5	100.0	87
	男性計	40.3	50.3	9.4	100.0	849
女性	長く住んでいる人が多い	58.7	26.1	15.2	100.0	501
	どちらかといえば長い	63.1	22.1	14.8	100.0	317
	入れ替わりがある	65.5	23.8	10.7	100.0	84
	女性計	60.9	24.5	14.6	100.0	902

男性 n. s. 女性 n. s.

夜の一人歩きの不安感が「ある」という割合に注目していく。

男性では、「長く住んでいる人が多い」37.7%、「どちらかといえば長い」42.5%、「入れ替わりがある」44.8%となっている。住民の移動が激しいと認知しているほど、夜の一人歩きの不安感が高い方向ではあるが、それほど大きな差ではない。統計的有意差はなかった。

女性では、「長く住んでいる人が多い」58.7%、「どちらかといえば長い」63.1%、「入れ替わりがある」65.5%となっている。男性同様、住民の移動が激しいと認知しているほど夜の一人歩きの不安感が高い方向ではあるが、それほど大きな差ではない。統計的有意差はなかった。

8. 都市規模と不安感

本調査では、標本抽出において都市規模別に層化を行っている。大都市（東京都区部、政令指定都市）、人口 10 万人以上の都市、人口 10 万人未満の都市、町村の 4 層である。ここでは、調査票の設問ではなく、これら 4 層の違いをみていく。

なお、標本数は、大都市 401 人（22.5%）、人口 10 万人以上の都市 690 人（38.7%）、人口 10 万人未満の都市 334 人（18.7%）、町村 357 人（20.0%）である。

(1) 都市規模と不安感

表Ⅲ-4-19 は、都市規模別に犯罪被害の不安感を表したものである。不安感が「ある」割合をみていくと、大都市 59.0%、10 万人以上都市 54.9%、10 万人未満都市 47.1%、町村 50.8%となっている。

大都市住民の犯罪被害の不安感がやや高いことがわかる。カイ二乗検定の結果、1%水準で有意な差がみられた。

表Ⅲ-4-19 都市規模と不安感 (%)

	ある	ない	合計	人数 (人)
大都市	59.0	41.0	100.0	400
10 万人以上	54.9	45.1	100.0	683
10 万人未満	47.1	52.9	100.0	333
町 村	50.8	49.2	100.0	356

$p < .01$

(2) 都市規模と夜の一人歩きの不安感

表Ⅲ-4-20 は、都市規模と夜の一人歩きの不安感について性別に集計したものである。夜の一人歩きの不安感が「ある」という割合をみていくと、男性では大都市 44.1%、10 万人以上の都市 38.3%、10 万人未満の都市 40.5%、町村 39.9%となった。大都市の男性がわずかに高めではあるが、それほどの違いではない。統計的有意差はなかった。

女性では、大都市 63.2%、10 万人以上の都市 64.8%、10 万人未満の都市 52.7%、町村 57.0%となっている。大都市、10 万人以上の都市が 10 万人未満の都市、町村と比べてわずかに高いが、それほどの違いではない。統計的有意差はなかった。

表Ⅲ-4-20 都市規模と夜の一人歩きの不安感 (％)

		ある	ない	分からない	合計	人数 (人)
男性	大都市	44.1	50.0	5.9	100.0	188
	10万人以上	38.3	49.4	12.3	100.0	326
	10万人未満	40.5	52.4	7.1	100.0	168
	町 村	39.9	49.7	10.4	100.0	173
	男性計	40.4	50.2	9.5	100.0	855
女性	大都市	63.2	25.4	11.5	100.0	209
	10万人以上	64.8	20.4	14.8	100.0	358
	10万人未満	52.7	30.3	17.0	100.0	165
	町 村	57.0	25.7	17.3	100.0	179
	女性計	60.7	24.4	14.9	100.0	911

男性 n. s. 女性 n. s.

(3) 都市規模と罪種ごとの不安感

表 3-4-21 は、都市規模別に、問 5 a) ～ p) でたずねたそれぞれの罪種の不安感の平均値を算出し、一元配置の分散分析を行った結果である。各罪種の平均点は、問 5 a) ～ p) の「非常に不安に」3点、「かなり不安」に2点、「やや不安」に1点、「不安はない」に0点をあたえ、平均値をとったものである。無回答は欠損値とし、集計対象から除外した。

a) 「暴力的な犯罪」では $p < .01$ で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、大都市と、10万人未満の都市・町村の2者との間に有意な差が示された ($\alpha = .05$)。すなわち、大都市の住民は10万人未満の都市や町村よりも、暴力的な犯罪の不安感が高いと言える。

b) 「自宅にどろぼう」では $p < .05$ で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、大都市と、10万人未満の都市・町村の2者との間に有意な差が示された ($\alpha = .05$)。すなわち、大都市の住民は10万人未満の都市や町村よりも、自宅にどろぼうに入られる不安感が高い。

c) 「ひったくり」では $p < .001$ で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、大都市と、10万人以上の都市・10万人未満の都市・町村の3者との間に有意な差が示された ($\alpha = .05$)。すなわち、大都市の住民は10万人以上の都市・10万人未満の都市・町村よりも、ひったくりの不安感が高いのである。また、10万人以上の都市と町村との間にも有意な差があった。

d) 「自転車の盗難」では $p < .001$ で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、大都市と、10万人未満の都市・町村の2者との間に有意な差が示さ

れた ($\alpha=.05$)。すなわち、大都市の住民は 10 万人未満の都市・町村よりも、自転車の盗難の不安感が高いのである。また、10 万人以上の都市と 10 万人未満の都市・町村の間にも有意な差があった。

e) 「自動車・オートバイ」の盗難の不安感では、都市規模による有意差はなかった。

f) 「すりにあう」では $p<.001$ で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、大都市と、10 万人未満の都市・町村の 2 者との間に有意な差が示された ($\alpha=.05$)。すなわち、大都市の住民は 10 万人未満の都市・町村よりも、すりにあう不安感が高いのである。また、10 万人以上の都市と町村の間にも有意な差があった。

g) 「自動車内の金品盗難」では、都市規模による有意差はなかった。

h) 「痴漢にあう」では、 $p<.01$ で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、10 万人以上の都市と、10 万人未満の都市・町村の 2 者との間に有意な差が示された ($\alpha=.05$)。すなわち、10 万人以上の都市の住民は、10 万人未満の都市や町村よりも、痴漢にあう不安感が高いと言える。

i) 「悪質商法などの詐欺にあう」では、都市規模による有意差はなかった。

j) 「自宅や自動車に落書き」では、 $p<.01$ で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、大都市と町村の間、10 万人以上の都市と町村の間に有意な差が示された ($\alpha=.05$)。すなわち、大都市の住民と 10 万人以上の都市の住民は、町村の住民よりも、自宅や自動車に落書きされる不安感が高いと言える。

k) 「自宅や敷地内に無断侵入」では、 $p<.05$ で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、10 万人以上の都市と町村の間に有意な差が示された ($\alpha=.05$)。すなわち、10 万人以上の都市の住民は、町村の住民よりも自宅や敷地内に無断侵入される不安感が高いと言える。

l) 「子どもが不審者から声かけ」では、 $p<.05$ で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、大都市と町村の間、10 万人以上の都市と町村の間に有意な差が示された ($\alpha=.05$)。すなわち、大都市の住民や 10 万人以上の都市の住民は、町村の住民よりも、子どもが不審者から声をかけられる不安感が高いと言える。

m) 「他人につきまとわれる」では、 $p<.001$ で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、大都市と町村の間、10 万人以上の都市と町村の間に有意な差が示された ($\alpha=.05$)。すなわち、大都市の住民や 10 万人以上の都市の住民は、町村の住民よりも、他人につきまとわれる不安感が高いと言える。

n) 「インターネット犯罪」では、 $p<.01$ で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、大都市と 10 万人未満の都市の間、10 万人以上の都市と 10 万人未満の都市・町村の間に有意な差が示された ($\alpha=.05$)。すなわち、大都市の住民は 10 万人未満の都市の住民よりも、10 万人以上の都市の住民は 10 万人未満の都市の住民や町村の住民よりも、インターネット犯罪の被害にあう不安感が高いと言える。

表Ⅲ-4-21 都市規模別にみた罪種ごとの不安感

		人数	平均値	有意水準
問5 a) 暴力的な犯罪	大都市	383	0.85	**
	10万人以上	663	0.77	
	10万人未満	322	0.70	
	町 村	335	0.68	
問5 b) 自宅にどろぼう	大都市	393	1.21	*
	10万人以上	675	1.14	
	10万人未満	331	1.05	
	町 村	343	1.04	
問5 c) ひったくりにあう	大都市	391	1.01	***
	10万人以上	663	0.85	
	10万人未満	327	0.72	
	町 村	335	0.68	
問5 d) 自転車の盗難	大都市	372	0.92	***
	10万人以上	662	0.92	
	10万人未満	326	0.67	
	町 村	341	0.72	
問5 e) 自動車オートバイの盗難	大都市	373	0.71	
	10万人以上	656	0.74	
	10万人未満	322	0.63	
	町 村	335	0.63	
問5 f) すりにあう	大都市	388	0.83	***
	10万人以上	659	0.72	
	10万人未満	322	0.63	
	町 村	334	0.57	
問5 g) 自動車内の金品盗難	大都市	376	0.66	
	10万人以上	660	0.73	
	10万人未満	322	0.71	
	町 村	340	0.76	
問5 h) 痴漢にあう	大都市	376	0.53	**
	10万人以上	658	0.56	
	10万人未満	323	0.42	
	町 村	337	0.42	

問 5 i) 悪質商法などの詐欺	大都市	387	0.85	
	10 万人以上	664	0.89	
	10 万人未満	325	0.90	
	町 村	340	0.84	
問 5 j) 自宅や自動車に落書き	大都市	379	0.77	**
	10 万人以上	661	0.78	
	10 万人未満	325	0.71	
	町 村	342	0.58	
問 5 k) 自宅や敷地内に無断侵入	大都市	385	0.88	*
	10 万人以上	666	0.95	
	10 万人未満	327	0.84	
	町 村	340	0.79	
問 5 l) 子どもが不審者から声かけ	大都市	367	0.93	*
	10 万人以上	657	0.90	
	10 万人未満	320	0.85	
	町 村	339	0.73	
問 5 m) 他人につきまとわれる	大都市	376	0.75	***
	10 万人以上	664	0.74	
	10 万人未満	324	0.62	
	町 村	336	0.54	
問 5 n) インターネット犯罪	大都市	380	0.67	**
	10 万人以上	661	0.69	
	10 万人未満	323	0.50	
	町 村	340	0.54	
問 5 o) 凶悪犯罪にまきこまれる	大都市	381	0.80	**
	10 万人以上	662	0.76	
	10 万人未満	323	0.64	
	町 村	335	0.61	
問 5 p) テロリストによる犯罪	大都市	384	0.70	***
	10 万人以上	661	0.58	
	10 万人未満	324	0.48	
	町 村	339	0.42	

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

o) 「凶悪犯罪にまきこまれる」では、 $p < .01$ で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、大都市と 10 万人未満の都市・町村の間、10 万人以上の都市と町村の住民の間に有意な差が示された ($\alpha = .05$)。すなわち、大都市の住民は 10 万人未満の都市や町村の住民よりも、10 万人以上の都市の住民は町村の住民よりも、凶悪犯罪にまきこまれる不安感が高いと言える。

p) 「テロリストによる犯罪」では、 $p < .001$ で有意な差がみられた。Tukey の HSD 法を用いて多重比較を行った結果、大都市と 10 万人未満の都市・町村の 2 者との間、10 万人以上の都市と町村の間に有意な差が示された ($\alpha = .05$)。すなわち、大都市の住民は 10 万人未満の都市・町村よりも、10 万人以上の都市の住民は町村の住民よりも、テロリストによる犯罪の不安感が高いのである。

以上、個々の罪種ごとに都市規模による不安感の違いを分析してきたが、概して、都市規模が大きいほど不安感が高い傾向にあることが示されたと言えよう。

9. まとめ

本章では、地域社会との関係からみた不安感等を分析してきた。

居住年数と不安感、夜の一人歩きの不安感との間にはっきりした関係はみられなかった。地域に長く住んでいれば不安感が低くなるというわけではないという知見がえられた。

当該地域に住み続けたいという居住継続希望と不安感では、有意差はないが、居住継続を希望している人は不安感がやや低い傾向にある。また、夜の一人歩きに関しては、女性では、「地域外に引っ越したい」という人は夜の一人歩きの不安感が高い傾向がみられた。ただし、男性ではそうした関連はみられなかった。

近隣関係(近隣に助け合える人がいるかどうか)と不安感では、直線的な関係ではなく、近隣とのサポート関係が非常に多い場合とほとんどない場合に不安感が低く、両者の中間の場合に不安感が高い。

男性の場合、近隣関係と夜の一人歩きの不安感との間にはほとんど関連はみられなかった。しかし、女性では、近隣に助け合える人が「たくさんいる」場合は、夜の一人歩きの不安感が「ある」という回答は低くなっている。すなわち、女性の場合は、近隣との結びつきが強ければ、夜の一人歩きの不安感は低くなる傾向がみられるのである。

町内会等への参加状況と不安感の分析では、統計的有意差はなかったが、「会費を払っているだけである」という人の不安感が若干高めであった。夜の一人歩きの不安感に関して性別に分析したところ、男性では有意差はなかったが、女性では、町内会に積極的に参加していると夜の一人歩きの不安感が低い傾向がみられた。

地域団体への参加状況と不安感の分析をしたところ、男性では関連がみられなかったが、女性では、参加していない女性の不安感がやや高い傾向がみられた。地域団体参加状況と

夜の一人歩きの不安感に関しては関連はみられなかった。

住民移動の認知と不安感の分析では、両者の間に関連はみられなかった。夜の一人歩きの不安感との間にも関連はみられなかった。

都市規模と不安感の関連を分析したところ、大都市は不安感が高い傾向がみられた。しかし、都市規模と夜の一人歩きの不安感の分析では、男性は両者の間に関連はみられず、女性においては、大都市や人口 10 万人以上の都市の住民は若干、夜の一人歩きの不安感が高い傾向がみられたが、有意な差ではなかった。

罪種ごとに都市規模と不安感の関連を分析したところ、おおむね、都市規模が大きくなるほど不安感が高い傾向がみられた。とりわけ、以下の罪種では都市規模の大きな地域の住民の不安感が高かった。「ひったくり」「自転車の盗難」「すり」「他人につきまとわれる」「テロリストによる犯罪」といったものである。

都市規模によって、それぞれの罪種に関する人びとの不安感が異なることが明らかになった。今後の対策にとって示唆的な結果がえられたように思える。